

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第112号 2026年（令和8年）3月20日  
編集・発行 神戸市立中央図書館  
〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1  
TEL：(078)371-3351 FAX：(078)371-5046

## 魚崎西町(東灘区)に残る2基の歌碑



『海道名所記』元文元年（1736）に加筆

（神戸市立中央図書館貴重資料デジタルアーカイブズより）

住吉川の西側に雀の松原があった



杖とめて千代の古塚とへよかし  
是や昔の雀松原

竹ならぬかげも雀のやどりと  
いらなりにけん松原の跡

## 雀の松原

雀の松原は、かつて魚崎に広がっていた景勝地です。平安時代の『和名類聚抄』には「佐才」と記され、古くは佐才郷と呼ばれていました。その後、住吉川の大洪水によって松林が生まれ「佐才松原」と称されるようになり、やがて「ささい」の音に「雀」の字が当て替えられ、後に「雀」と読まれるようになったと言われていいます。鎌倉期にはすでに広く知られ、『源平盛衰記』には名所として、『平家物語』には戦域の一角として登場します。さらに南北朝期には、観応の擾乱の際に周辺が戦場となり、雀の松原に足利尊氏方の軍勢が布陣したことが『太平記』に記されています。白砂青松の景観は人々を魅了し、多くの歌が詠まれました。

また、この地には「雀合戦」というユーモラスな民間伝承が残ります。数年に一度、丹波から攻めてくる雀の大軍と松原の雀が争い、その様子を見ようと多くの見物人が集い、なかには戦死した雀を焼き鳥にして売る者もあつたと伝えられます。雀の地名になぞらえ、史実の合戦を戯画化して語られた伝承でしょうか。

現在、松原は失われましたが、阪神魚崎駅近くの広場に残る石碑が、往時の名声を静かに伝えていきます。

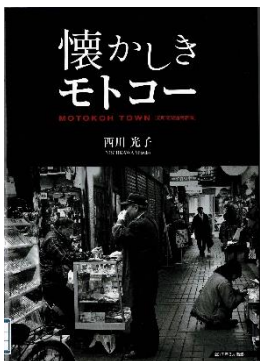
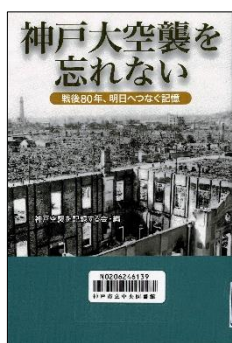
参考：『魚崎町誌』、『東灘歴史散歩』ほか

神戸大空襲を忘れない 戦後80年、明日へつなぐ記憶 神戸空襲を記録する会編（神戸新聞総合出版センター）

昭和四十六年の発足以来、空襲体験記の出版や空襲犠牲者の慰霊碑の建立など幅広い活動を展開してきた「神戸空襲を記録する会」が、戦後八〇年の節目に刊行。

前半には、新たな体験記に加え、戦後史のなかで埋もれてきた戦争孤児の貴重な証言が集められた。後半は、同会の歩みと成果が綴られる。また、昭和二十年七月に神戸に投下された模擬原爆に関する調査内容も掲載されている。

風化させてはならない過去を記録し、未来に継承する同会の取り組みに新たなページが加わった。



懐かしきモトコー 元町高架通商店街 西川光子写真・文（神戸新聞総合出版センター）

JR元町駅から神戸駅までの高架下に続く「モトコー」は、戦後の闇市を起源とし、中古品店などが並ぶ独特の雰囲気で見られてきた。現在は耐震工事が進む。

本書は神戸生まれのアマチュア写真家によるモノクロ写真集。二〇一一年から撮影された在りし日のモトコーの姿が収められている。かつての「ごちゃまぜ」な活気がよく見え、店主と客のやりとりが聞こえてくるかのようだ。

セツと八雲 小泉凡著 木元健二聞き手（朝日新聞出版）

NHKの連続テレビ小説のモデルとして注目が集まる、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）とその生涯を支えた妻・セツ。明治二十七年に八雲が神戸クロニクル社の新聞記者となり、二人は約二年間を神戸で暮らした。八雲は神戸を気に入った妻のために素敵な家を建ててやりたい、と手紙に記した。二人の歩み、そして生まれた文学の魅力を、ひ孫で記念館館長の小泉凡氏が語る。

大谷探検隊吉川小一郎 探究と忍耐 その人間像に迫る 龍谷大学龍谷ミュージアム編集・発行

吉川小一郎（一八八五〜一九七八）は、本山村字岡本（現・東灘区）の山麓に建てられた大谷光瑞の別邸・二楽荘の建設に関わり営繕担当として勤務した。その後、大谷探検隊第三次隊の一員として大陸に渡り、約三年間中央アジア各地の仏教遺跡を調査、帰国後は、二楽荘売却の処理に従事した。吉川の足跡と人間像に迫る展覧会図録。書簡や記録写真等、貴重な資料を多数掲載している。

夏鶯 赤神諒（集英社）

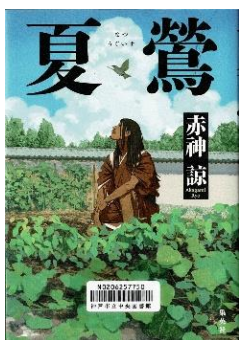
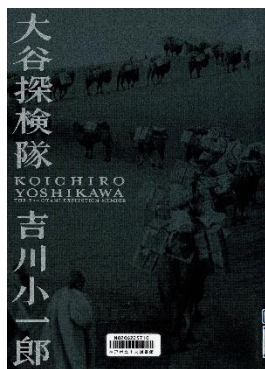
「神戸事件」の責任を負い切腹した岡山藩士・瀧善三郎。本書は事件と彼の生涯に着想を得て、過酷な運命に翻弄されながらも武士としての誇りを貫いた主人公・滝田蓮三郎の生涯を描いた時代小説。蓮三郎は一七歳にして岡山城へ出仕するが、故あつて永塾居を命じられ、故郷の金谷へ戻されてしまふ。一時は自暴自棄になるが、次第に金谷の人々から慕われる存在となつていった蓮三郎は一五年ぶりに永塾居を解かれたが…。

阪神・淡路大震災資料集 住吉の記憶「女性・子どもの目」 住吉学園・住吉歴史資料館編集・発行

東灘区住吉地域で暮らす人々の震災体験や復興の歩みを記録した資料集の第四集。これまで十分に取り上げられてこなかった、女性や子どもの視点から見た震災の姿を収めている。

当事者への聞き取りに加え、詳細な注記や客観的データを交え、当時彼らが置かれていた状況を具体的に検討。震災から二カ月後に住吉中学校の生徒が描いたスケッチも掲載されている。

地域の生活文化を踏まえた災害体験の記録は、全国の次なる災害への貴重な教訓となるに違いない。



いつかよみがえる日のために 阪神・淡路大震災で全壊した谷崎旧邸、鎖瀾閣 資料集 鎖瀾閣復元委員会編（特定非営利活動法人「潤」）

東灘区岡本にある谷崎旧邸、鎖瀾閣。転居を繰り返した谷崎が唯一自ら設計し、中国趣味を取り入れた和風邸宅で、この家で『蓼喰ふ虫』や『卍』が生まれた。震災で全壊してしまったが、令和七年にR映像での復元を果たした。

本書は、鎖瀾閣を後世に残そうと奔走する復元運動の全記録である。邸宅の写真や再建運動を報じた新聞記事、運動の経緯をまとめた年表など、豊富な資料が掲載されている。復元に対する揺るがぬ思いが力強く伝わってくる。

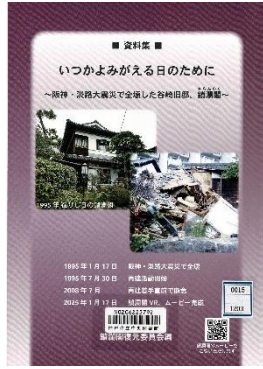
おいしいお米をつくりたい！ ゆうちゃん、小学生で農家に弟子入りしました 谷本雄治（汐文社）

小学生の「ゆうちゃん」こと新宅佑輔くんは、農家の中井知広さんの作る米の美味しさに感動。三年生の自由研究のテーマに米作りを選び、中井さんに弟子入りして、西区神出町で米作りを始めた。

小学生にとって米作りは重労働ばかりだ。田起こし、田植え、雑草や害虫との闘い、そして台風を乗り越えて、ようやく稲刈りができる。苦労を経て収穫した米はとても甘く、努力が実を結んだ。二年目には工夫を重ね、目標の収穫量にも到達した。ひたむきに米作りに向き合う少年の姿がまぶしい。

### その他の新刊II

淡河の城と淡河氏の運命 戸田紘著・発行  
アスベストリスク 阪神・淡路大震災から30年 災害とアスベスト―阪神淡路30年プロジェクト編集・発行  
今日も、ちゃ舞台の上でおどる 坂口涼太郎（講談社）



### 神戸 その③⑤ あんな人こんな人

### 金山 平三 かなやま・へいぞう 明治16年(1883) ~ 昭和39年(1964)

金山平三は日本近代洋画を代表する画家の一人です。元町通3丁目に生まれ、2歳の時に生母を病気で亡くし、父・春吉が後妻を迎えたのち一家は元町通5丁目に移りました。後妻との関係は良好で、平三の留学費用も工面するほど大切にされていました。神戸尋常小学校を卒業後は京都の同志社予備学校に進みましたが、持ち前の腕白さから学校を転々とするようになります。明治37年に東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学し西洋画科へ。ここでは学業成績、品行が優れていると認められ、2年連続で特待生に選ばれました。画家の黒田清輝に師事し、明治42年に首席で卒業。明治44年に神戸に戻り、翌年から約4年にわたるヨーロッパ留学へ旅立ちました。

留学から帰国した翌年の大正5年、第10回文部省美術展覧会で風景画『夏の内海』が初入選にして特選第2席を受賞しました。その後、平三は帝国美術展覧会の審査員も務めました。昭和10年の帝国美術院改組をめぐる騒動を機に画壇と距離を置き、独自の創作活動を貫くようになります。

平三は風景画に力を注ぎましたが、「芝居絵」も残しています。明治中期から神戸にはさまざまな劇場が生まれました。平三は花隈の播半座をはじめ、大黒座、八千代座、相生座などへよく通っていたそうです。平三自身も「私は五つ六つ頃から芝居がすきであつた。（中略）芝居に出て来た人物の仕草や、着付の色や模様などを覚えてゐる。その頃のことを記憶の中に辿って此頃畫生活にかなり役立つてゐる。」（「思出の春」『美術新論』昭和7年1月号）と書き残しています。



【参考】『金山平三』飛松實（日動出版部、1975）、『金山平三展 生誕100年 幻の画家が描いた日本の自然』（兵庫県立近代美術館、1983）ほか 【画像】『金山平三全芝居絵』（朝日新聞東京本社企画部、1971）

### 北区の農村舞台

神戸市には、江戸時代から受け継がれてきた貴重な文化遺産「農村舞台」が複数残されています。

農村舞台は、農山漁村で芸能を上演するために造られた舞台建築です。特に兵庫県内には、「農村歌舞伎」を演じるための舞台が多く造られました。江戸時代、町人文化として花開いた歌舞伎が地方の農村にも広まって、農民が演じる「農村歌舞伎」として定着し、舞台が築かれるようになったのです。舞台の多くは神社の境内にあり、神に奉納する能などの舞台と兼ねている場合もあります。

江戸時代には農民への芝居禁止令が何度も出ていたため、奉納用の舞台とすることで取り締まりを免れたのではないかとという説もあります。日本最古の農村舞台は、北区淡河町の厳島神社境内にある北僧尾農村歌舞伎舞台で、安永六年（一七七七）の建築とされています。農村舞台研究家の松崎茂らが執筆した『神戸の農村舞台』神戸市文化財調査報告7（昭和三十九年刊行）では、「山田町

に14棟（現存6棟）、淡河町に15棟（現存7棟）、押部谷町に5棟（現存2棟）、櫛谷町に1棟（現存しない）の計35棟の農村舞台が神戸市内に在ったとされています。

これらの舞台のなかには、高度な仕掛けを備えたものもあります。北区山田町の天満神社境内にある上谷上農村歌舞伎舞台（一八六三年建築）には、珍しい「床几廻し式」の回り舞台があり、台座をまわすことで台上にとりつけた背景が表裏入れ替わり、素早く場面転換ができる工夫がされています。同町の天彦根神社の境内にある下谷上農村歌舞伎舞台は、棟札に天保十一年（一八四〇）再興とあり、起源はさらに古いと考えられます。間口一二m、奥行八mの大規模な舞台の設備は国内で比類のないもので、回り舞台のほか、上下に一八〇度回転して橋が現れる仕掛けのある花道を備えています。



花道から橋が出現する様子  
(2019年11月撮影、神戸市文化財課提供)

北区の農村舞台は、昭和三十七年（一九六二）に写真家・三村幸一が神事撮影のため訪れた八阪神社（山田町原野）で偶然発見したことを契機に、日本演劇学会等による調査が行われました。日本演劇学会は調査後、農村舞台の復元・保存措置を講じるよう県・市教育委員会に意見書を提出しました。これを受けて神戸市教育委員会は舞台の視察を行い、前出の松崎らに調査を依頼するなど、重要民俗資料（現・重要有形民俗文化財）の指定を目指して動き始めます。そして、下谷上農村歌舞伎舞台は昭和四十一年に兵庫県の、四十三年に国の重要民俗資料に指定され、昭和四十一年に設立された保存会を中心に、地元住民が大切に管理してきました。

しかし、昭和五十二年一月二十三日未明、火災がおこり、貴重な花道や回り舞台、装置の多くが焼失してしまいます。舞台は一部骨格を残すばかりとなり、重要民俗資料の指定も解除されるかと不安が広がりましたが、文化庁から指定継続の意向が伝えられました。全焼した建築物の指定継続は日本初で、同舞台の保存会会長は「文化庁の決定は復元運動への大きな励ましになった」（『神戸

新聞』同年三月十一日）と語っています。

昭和五十四年九月には修復工事が完工、十一月には修復を記念して、江戸時代から続く「播州歌舞伎」の伝統を継承する、嵐獅山一座による上演が行われました。



下谷上農村歌舞伎舞台 (2026年1月撮影)

令和七年（二〇二五）九月には下谷上農村歌舞伎舞台の茅葺屋根の修理が行われました。また、北区では現在も農村歌舞伎の上演会や体験会が催されるなど、農村舞台が地域の人々の手で保存・活用され、文化継承の拠点となっています。

\* 八阪神社の舞台は解体され現存しない

【参考】『山田郷土誌』

『神戸電鉄沿線の農村舞台

群』『兵庫県の農村舞台』

ほか



リサイクル適性 (A)  
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。